

世界遺産の「高野山」  
4・8 キロを歩く

連休明けの5月7日、シルバー対象の年輪ウォークに参加。今回は高野山を歩きました。

中の橋から奥之院、別ルートでまた中の橋まで戻り一の橋を通って金剛峰寺を経て根本大塔、金堂から金剛峰寺へ帰る、の4, 8 Kの行程でした。私は奥之院行はパスして中の橋から金剛峰寺への、3, 5 Kの短縮コースを選びました。

一の橋までは、歴史上の人物や、南海電鉄の社長やらのお墓ばかりがずらりと並んだ道でした。でも木立の中森林浴をしながら、よく知っている石田光成や紀州徳川家、武田信玄、伊達正宗などのお墓を見つけ、それぞれの歴史に思いをはせゆつたりと歩きました。



高野山にお墓を立てるのは、弘法大師の眠る場所に近いところに先祖を眠らせてあげたいとの思いのようです。何百年もの年月を経たであろう杉の大木の中に、大きな石を積み上げた供養塔がいくつもありません。



京の枝垂桜見物

その(1) 勸修寺

JR山科から京都地下鉄東西線に乗り換えて小野駅で降りる。まずは歩いて15分、勸修寺に着く。目的の枝垂れ桜は7分咲き。早かったかと

少し気落ちするがこのお寺は桜がご自慢ではない。その寺伝とお庭である。創建は西暦九百年醍醐天皇の生母藤原胤子追善の為だった。その後平安時代から数々の戦乱に巻き込まれ、全く荒廃していたが徳川氏や皇室の援助により復興された。氷室の池、を中心に宸殿、書院、本堂、庭園が物静かに立ち並ぶ。毎年一月二日に張った氷を五穀豊穡の祈願とし、宮中に献上していたらしい。庭園に珍しいものが二つ。その一つ、「ハイビヤクシン」というヒノキ科の匍匐性の常緑灌木が20畳敷くらい



の広さの低地に広がっている。樹齢七百年と言われるが根はさっぱり判らない。もう一つはその茂みの中にユニークな形の灯籠が立っている。「勸修寺型燈籠」で水戸光圀公の寄進と伝わる。水戸黄門が笠を被って、茂みよりじつと眺められているような気がしてくる。

小野駅に戻り、東西線の北に出て随心院に立ち寄る。門跡寺院として代々皇族や撰閣家出身者が住職となった由緒ある

寺で、立派な置物や襖絵などがある。

この一帯は小野一族が栄えた場所。有名なのは小野小町だ。竹やぶの中に彼女が毎日使っていたと言われる「化粧の井戸」や深草少将をはじめ小町を慕う男たちの通った小道がある。この寺の梅林で観梅会と「はねず踊り」が催される。ここの梅は少し濃い色で、日本語に「はねず色」(唐棣色)という言葉がある事を知った。

目立つてきた。三宝院のお庭には歴代の権力者が所有してきた「天下の名石・藤戸石」や亀島・鶴島などが名庭師によって配置されている。勅使門の屋根は檜皮葺き、正面は黒い漆塗り、その上には金箔を施された菊と桐の四つの大きな紋が異様に光っている。この御紋が

その(2) 醍醐寺  
秀吉も見たか  
この醍醐寺の桜。

世界遺産の醍醐寺である。寺伝では八七四年空海の孫弟子の理源が醍醐山の頂きからこんこんと湧き出ているのを見つけ、そこに草庵を造って、観音像を安置したのが始まりとされている。室町時

代に全盛を極めたが、応仁の乱等の兵火に巻き込まれ、廃寺同然になった。その後百三十年余りすぎ、親交のあった豊臣秀吉の援助のもとに代80世、座主義演が復興させた。その象徴が「秀吉醍醐の花見」である。3月末から4月上旬にかけて広い境内の枝垂れ桜は見事、絢爛豪華、雪景色を見るのがとしという他言葉がない。ひととき目立つのは樹齢百五十年という大人3人がかりもある太い幹の枝垂れ桜か、国宝の五重の塔の前にかかる枝垂れ桜かはたまた奥村土牛画伯のモデルになった大閻枝垂れ桜か。秀吉が見た桜は多分代替わりしているであろうが、さすがの太閤枝垂れ桜も幾世代も耐えてきて支えが目立つてきた。三寶院のお庭には歴代の権力者が所有してきた「天下の名石・藤戸石」や亀島・鶴島などが名庭師によって配置されている。勅使門の屋根は檜皮葺き、正面は黒い漆塗り、その上には金箔を施された菊と桐の四つの大きな紋が異様に光っている。この御紋が



編集後記

1年で一番気持ち良いこの季節あちこちにお出かけされる機会も多いと思います。その場で出会われた景色、感動を是非この紙面にお届け下さい。お待ちしております。

編集委員一同

